



少年と犬

+

プラス

-- Boy and dog --

原作: カント
AUTHOR KANTO

イラスト: 茶桜
ILLUSTRATION TYAZAKURA

©

Asian Kung - Fu Project



少年と犬⁺

プラス

-- Boy and dog --

原作：カント
AUTHOR KANTO


イラスト：茶桜
ILLUSTRATION TYAZAKURA

Asian Kung - Fu Project

c o n t e n t s

1. 「作者不詳」
2. 「少年と犬」
3. 「クライン」



 Asian Kung - Fu Project

二日月が、三日月に変わった。

男は走る。ただ走る。動かない雑踏の中をかき分けて、ただただ走り続ける。

男は走りながら月を見た。月といっても頭上には無い。彼から見て遙か前方に、巨大な三日月が浮かんでいる。月の周囲は真っ黒だ。星は無い。何も無い。何も見えない。

男は走る。灰色のビル街には鋭く黒い影が走り、道に点在する無数の人影はどれも苔むした石像のように棒立ちになっている。肩をぶつけても微動だにしない。そのくせ、切り傷のような薄ら笑いだけは浮かべている。

足がもつれ、男は転んだ。痛みは無い。

群衆から、緑色の嘲笑が巻き起こった。

三日月が、半月に変わった。

男は齒を食い縛り、憎悪と嫌悪に拳を握りながら立ち上がり、灰色を破り捨てるかのよう
に再び地を蹴った。

こんなことになるなら。

こんなことになるなら、もっと早くに処分しておけばよかった。

半月が、十三夜月が変わった。

満ちていく月の中、男はひたすらに走った。

今この瞬間しか男は動けない。それは何日も何日も——もう何週間も——この場所に囚わ
れ続けた末に辿り着いた、一つの結論だった。

ここには昼と夜がある。昼は焼き尽くさんばかりの光が彼の体を縛り付ける。夜は絞め殺
さんばかりの闇が彼の体にまとわりつく。その束縛から放たれるのは、毎夜の——あの月が
掛かる——この時間だけだ。

少しずつ、少しずつ、男は走ってきた。もう少しだ。もう少しで、自分はあの月に辿り着
く。

あの月に辿り着きさえすれば、自分は——。

十三夜月が、小望月が変わった。

雑踏の終わりが見え始めた。重く、硬く、動かない人影の中で、男の顔に黄色の希望が混じる。

「今日はどこまで行けますかな」

誰かの嘲りが聞こえた。男の顔に朱色の怒りが混じる。

小望月が、満月に変わった。

月が欠け始める。男は走る。雑踏を抜けた。長く広く、影も塗りつぶさんような焦げ茶色の、泥で出来たような並木道が、目前に漠と広がっている。

人影は居ない。邪魔者は居ない。後はここを走るだけだ。

「もう少しで御座いますねえ」

頭上から声がした。立ち止まり、膝に手を当てて肩で息をしながら、男は虚無な天を見上げる。

口の裂けた巨大な鳥と、目が合った。大きく広げた羽の中では、ねじれた無数の曲線が渦巻を作り上げている。嘴は白い。垂れた目じりの底に黒い瞳がある。男を見ている。

鳥はケタケタと笑った。

満月が、十六日月に変わった。

青色の不愉快に身を染めながら、男はまた走り出した。

一本道は長かった。酷く凸凹で、男の足は何度も絡まった。

わき腹が刺すように痛んだ。若くは無い体が軋む。

十六日月が、立待月に変わった。

男は走った。月が少しずつ近づいてくる。雑踏の長さには何度も心が折れそうになったが、ここはそう距離があるわけでは無いらしい。このペースでいけば。

きつと。

紫の苦しみを振り払い、男は駆けた。またどこかでケタケタと鳥が笑った。男は駆けた。

立待月が、居待月に変わった。

男の足は、止まった。

目の前に、崖が開いていた。

雑踏からは見えなかった。並木道からも見えなかった。近くに来てようやく見えた。

数センチもの巨大な裂け目が――濁った紫色の絵筆の跡が――、男の足を縛りつけた。

居待月が、臥待月に変わった。

藍色の絶望が、男の視線を月へと向けた。

見る見る内に、月が欠けていく。

暗闇を穿つ光の筋が、目の前で薄くなっていく。

あの月が。

唯一の出口だと。

雑踏の動かない人影たちは笑って言った。

臥待月が、更待月に変わった。

男は拳を握り締めた。頭に響く嘲りの声を打ち消し、周囲を見回した。

崖は視界の端から端へと続いている。渡れそうなどころは無い。どこも数センチの幅で、

あの月と分かたれている。

いや。

じっと目を凝らした。額縁の近く、赤茶色の大地が見える。その付近はまだ、この辺りよりも崖が小さく映った。

遠近の見せる幻だろうか。

ここで立ち止まっていた方が、更なる絶望を見ずに済むのだろうか。

更待月が、弓張月に変わった。

男は頭を振った。そしてまた、走り出した。

月はもう薄くなっている。出口はもう薄くなっている。これを逃せば次の機会はまた明日になる。しかし、その明日がやってくるかどうか、男には疑わしい。

二度と明けぬ夜が来るかも知れない。

恐怖が、男を総毛立てた。

戦慄に押し負けぬよう、男はこれまでよりも強く、カンバスを蹴飛ばした。

やがて、暗い大地が目の前に来る。崖は中央部の半分程度の厚さだった。

男は跳んだ。やがてその体は、カンバスの最下段に辿り着いた。

男は月を見上げた。希望はまだ、光として男に投げかけられている。

男の胸に、橙色の安堵が満ちた。

立ち上がり、男はまた足を動かした。

弓張月が、朔に変わっていく。入れ替わっていく。

光が、横切っていく。

男は走る。ただ走る。何も無い赤茶色の世界を蹴り飛ばし、ただただ走り続ける。月が目前にあった。

男は手を伸ばした。

そうして、縫り付くように男がその月に触れようとした、その刹那、
焼き尽くさんばかりの光が、彼の体を縛り付けた。

突然館内が光に満ちて、若い警備員は思わず天井を見上げた。来館者を迎える照明が煌々と灯っている。怪訝に思いながら手にしている懐中電灯を虚空に向けると、幾つかの足音が届いてきた。

「あ、ご苦勞様です」

入り組んだしきの角から現れたのは、若い女性だった。警備員も顔なじみの、この美術館の係員だ。警備員が尚も疑問を抱きつつ頭を下げると、女性の後ろから、更に初老の男性が現れた。

「やあ、すまないね。このコが財布を忘れたらしくて」

「忘れ物……ですか」

美術館の館長の言葉に、警備員はようやく懐中電灯の明かりを消した。若い女性はすいま

せんすいませんと恥ずかしそうに謝りながら、警備員の隣を駆けて行く。

「見回りご苦労様。急に電気がついて驚いたろう」

「いえ、しかし……」

何故館長まで、と警備員は問う。若い警備員のその言葉に、初老の男性は苦笑いをして、何でも怖かったらしい、と言った。

「昼間は慣れていても、やはり真っ暗な館内は不気味だと、電話越しにそう言われてね。と言っても、結局電気はつけたんだが……全く、ここに勤めてもう何年になるのか」

「ああ、そういうことですか。でもその気持ち、分からなくもないです」

事情を知った警備員はようやく警戒を解き、館長へと笑いかけた。遠くから、足音が近づいてくる。

「自分ももう数年間、こうやって見回りをしていますが、暗闇に並ぶ絵の中を進んでいくのは、なかなか慣れないものです。いつもこうやって……絵の方に灯りを向けて歩くんですが、時々、絵の中の人と目が合ったりして……」

近くの額縁を横に切るかのように懐中電灯を動かす警備員の所作に、館長は成る程ね、と笑った。その頭には、まるで絵の具のように真っ白な髪が混じっている。

「すいません、見つかりました！」

女性の声が、照明の中に響き渡った。警備員と館長の元に来て、再度すいません、と頭を下げる女性へ、館長はにこやかに、今度からは注意するんだよ、と忠言する。

「本当にすいません。でも館長、ありがとうございました。こんな夜遅くに……」

「なに、これくらいは構わないよ。それに、暗いところで絵が怖くなるのは、珍しいことじゃないらしいから」

怪訝な顔を見せる女性に、警備員は先ほど館長に行ったものと同じ説明を繰り返した。味方がいることを知り、女性はそうですよ、と大きな声を上げる。

「やっぱり、怖いですよ。私なんて、昼間見ても気味が悪い、って思うものもあるんですけど。……ホラ、例えばこの絵！」

女性は足音を立てながら、すぐ傍に掛かっていた絵に進んだ。先ほど、警備員が懐中電灯で示した絵だ。

「これなんて全体的に暗いし、何が言いたいのかわからないし、描かれてるものも不気味じゃないですか。おまけに、作者も名前も分かってないですし」

「……その絵か」

ボソリと館長が呟く。警備員も女性に釣られ、絵のすぐ傍に寄った。

大きな絵だった。警備員には号数という単位でそれを言い表すだけの知識は無かったが、縦一メートル、横半メートルほどの、小学生くらいならば丸ごと中に納まりそうな大きさのものだ。

上半分は灰色で、ビル街を表わしているのだろうか。幾何学模様の中に幾つかの黒い筋が入り、その中に無数の人影が、臍気に佇んでいる。画面遙か奥から手前へと向かって描かれたそのビル街は、何とも言えず陰鬱な雰囲気だ。

下半分は暗い茶色で塗りつぶされていて、その中に二、三の巨大な怪鳥が描かれている。最下段には何を表わしているのか、紫色の割れ目が走っていた。そして、その割れ目の更に下に、画面手前へと手を伸ばす小さな人影がある。

その絵は警備員の腹部の辺りに額縁の下が来るように飾られていて、その大きさも相まって妙な威圧感を醸し出していた。額縁の下にちょこんと張られたネームプレートを見ると、確かに作者不詳、タイトル不明と書かれている。

「自分もこの絵は……何となく不気味に感じますね」

「でしょ？ この絵、お客様からもあまり評判良くないんですよ。館長も前に仰ってたじゃ

ないですか、この絵、もう処分しよう、って」

館長は何も言わず、女性と警備員の後ろに立った。塗りつぶしたように黒い瞳が、じっと絵の中を見つめている。警備員は尋ねた。

「評判悪いんですか、これ」

「ええ。なんていうか……吸い込まれそう、って言ったら良い様に聞こえるかもしれませんが、けど、悪い意味でよくそう言われるんですよね。吸い込まれそう、っていうより……」

取り込まれそう、かな、と館長が後を受ける。オーバーアクション気味に頷く女性と、背中手に手を回して落ち着いた様相の男性は、ひどく対照的だ。

「そう言えば、この絵の処分の話、どうなったんですか？ 館長が倉庫に持って行く、って仰ってから、もう随分経ってますけど……」

「さあて……」

初老の男性が、どこか芝居じみた口調で頭を振った。その時。

「どうなったと思います？」

警備員は不意に、漠然とした——けれど、とても鋭い——悪寒を感じた。

理由は分からない。館長は切り傷のような薄ら笑いを浮かべている。警備員は女性に視線

を向けた。

女性もまた、怪訝そうに館長を見つめていた。やがて目が合い、警備員と女性は互いに首を傾げる。

警備員はもう一度、館長を見つめた。真っ黒な、絵筆で塗りたくったような瞳。

その視線は、陰鬱な絵の最下層——画面手前へ——こちらへと手を伸ばす、小さな小さな人影へと向けられているようだ。

……ふと、警備員は疑問に思った。

「じゃあ、処分しようか」

「え？」

「お客様にそう言われるのなら仕方ない。元々、古いという理由だけで飾られていたようなものだしね。価値があるかどうかも分からないし」

淡々と続ける館長の言葉を聞きながら、警備員は首を傾げる。

こんな人影、以前から描かれていただろうか？

「さて、じゃあそろそろ出よう」

記憶を辿る警備員を押し止めるかのように、館長の言葉は静かな館内に響き渡る。女性が

返事をして歩き出した。それに伴い、違和感を拭えぬまま、警備員もまた絵の傍を離れる。明日には、もうあの絵はここに掛かっていないのだろう。そう考えると、警備員は少し複雑な気分になった。自分の同意が、あの絵を葬る要因の一つになったということが、不可解にも、どうにも気が咎めた。

「館長、行きましようよー」

連れ添って歩く女性が、振り向いて言った。警備員も共に振り向くと、初老の男性はネームプレートと思しき紙を取り、何やら書き加えているようだった。

「ああ、今行くよ」

男性がネームプレートを例の絵の下に戻し、歩いてくる。きっと処分するというような旨を書いたのだろう。警備員はそう思い、そのまま美術館職員達と、その場を後にした。

翌日。【逆転】と題されたその絵は朝の内に倉庫へと運び込まれ、やがて灰になった。

(完)

カント KANTO

原作 — author —

— Asian Kung-fu Project —
<http://esistgut.web.fc2.com/>

● 茶桜 TYAZAKURA

イラスト — illustration —

— あんみんまくら —
<http://gbedvfdzbbzgnb.web.fc2.com/>

それは始まりの、そして、永遠へと続く物語。

安らぎの炎で夜を屠る『魔法』の王国、エバー。そこに住まう平凡な少女・ダニエル。国を挙げての祭りの最中、彼女は出会う。1人の少年と1人の犬、奇妙不可思議な旅人達に——。サークル [Asian Kung-fu Project] が放つファンタジー SF 小説『少年と犬』シリーズ第1作が、短編2作を同時収録し、装いも新たに再登場！

